

# コメントライナー

第6737号

2019年6月17日(月)

## ◎災害時における車の功罪

防災・危機管理アドバイザー 山村 武彦

### ◆車ごと流される犠牲も

1年前の7月7日、広島県坂町で見たのは原形を留めぬ夥しい車の残骸だった。それが道路を塞ぎ、家に突っ込み、川を堰き止めていた。死者・行方不明232人という犠牲を出し、「平成30年7月豪雨」と命名された西日本豪雨の現場。マイカーだけでなく、緊急車両、福祉車両まで流失・水没していた。

この災害で支払われた車両保険は25,131件(損保協会)。平均44.4%の車両保険加入率から類推して、被災車両は5万台以上とみられる。車ごと流され犠牲になった人も多い。約2万台が被災し、12人が車中で死亡した長崎大水害(1982年)をも上回る。

車は、なくてはならない暮らしの利器。しかし、洪水時、車は容易に浮き上がって流され、時に二次災害を引き起こす。東日本大震災時、津波により東北3県で車両約23万6千台が流失。地域によっては避難車が大渋滞し、やはり車ごと流された痛ましい例も多い。

### ◆頑丈そうだが冠水に弱い

一般車の場合、タイヤ半分(10cm程度)まで冠水すればブレーキ性能は低下。ドアステップまで冠水すると、マフラーや吸気口から浸水し、エンジン停止の確率が高まる。ドアステップより10~20cm以上水位が上がると、車は浮き上がりハンドルが効かなくなる。さらに電気系統が故障し、エンジンは停止。ドアの半分以上になると水圧で開かなくなり、車内にも水が浸入、パワーウインドーさえ動かなくなる。こうなると脱出するには窓ガラスを割るしかない。フロントガラスより横の窓の方が割りやすい。しかし、道具がないと割るのは困難。緊急脱出用ハンマーの備え付けは全車必要だ。

そして、水が引いたからといってすぐに冠水車のエンジンをかけると、出火や感電のおそれもある。必ず専門家の点検・確認後に動かすことが肝要。ともかく車は冠水に弱い。近年、気候変動による豪雨の頻発傾向が顕在化し、水災害は激化している。大雨警報時、車で外出は極力避けるのが賢明だ。

### ◆役立つ車とその使い方

一方で、災害に強い車と呼ばれているのが電気自動車(EV)とプラグインハイブリッド車(PHEV)。平成30年の北海道胆振東部地震の時、道内に約1000店のコンビニを展開するセイコーマートは、こうした車のバッテリーから電気を取り込み、夜間も営業を続け市民に感謝された。あらかじめ簡易レジ、LED照明、電源コードなどの用意があったからできたことだ。

札幌では真っ暗な住宅街の中で、そのマンションだけ灯りが点いていた。そこは管理組合で電気自動車を購入していたからである。普段は住民がカーシェアし、ブラックアウト(大規模停電)時には車から電気を供給し、共有部の照明を活かした。こうしたEV車やPHEV車の大型蓄電池は、一般家庭であれば3~5日分の電気が賅える。ソーラー発電システムと組み合わせれば、さらに長時間停電にも対応可能。ただし、それには直流・交流変換インバーターなどの準備が不可欠だ。

連続地震が頻発した熊本地震では、多くの家族が車中泊を余儀なくされた。いざという時、車は一時避難所にもなる。そのためにも車のトランクには水・食糧、毛布などの備蓄が大切。車は使い方と準備次第で、その功罪の明暗が左右される。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003